



協会新会員「郡上市歴史資料館」をよろしく

郡上市歴史資料館は、2025年4月岐阜県博物館協会に新たに加盟をしました。協会事務局様には今回加盟にあたり当館紹介の機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。当館は旧市役所中坪庁舎跡地（郡上市八幡町中坪226番地1）に2018年4月に開館しました。開館から7年が経過し、これまでに市外の博物館関係者や行政機関等23団体の視察を受け入れました。視察者からは、異口同音に厳しい地方財政下これだけの施設がどのようにして建設できたのかと問われました。そこで最初に当館の概要を述べ、次に館設立の経緯と目的について、最後に事業内容を紹介したいと思います。

現在、管理運営は郡上市直営、職員体制は社会教育課長が館長、正規職員（学芸員有資格者）1名、会計年度職員4名（副館長他）及び資料調査員2名となっています。施設はRC造のエントランス棟、木造の収蔵棟・展示棟の3棟からなり建物面積の合計は約1400㎡です。収蔵棟は1階が美術工芸品・歴史文書・写真等を収蔵する特別収蔵庫、2階が主に行政文書を収蔵する一般収蔵庫で、いずれも前室を備えています。特別収蔵庫は温湿度の集中管理が可能で、一般収蔵庫とともに窒素ガス消火設備を整えています。展示棟は地下が考古・自然資料収蔵庫、1階が閉架書庫等、2階が整理作業室、展示・閲覧コーナー、事務室となっています。エントランス棟の2階には講座等を行う会議室があります。

設立の経緯は、郡上市誕生の2004年に「郡上市史編さんに関する条例」を制定、その後「第1回郡上市史編さん委員会」が開催されます。そこで市史編さんの事業内容が協議され、最初に取り組む事業が「史資料を保管する施設の整備」に決定されたことに端を発します。また新しい施設建設を推進する背景が3点ありました。1点目は建設部などが独立して配置されていた中坪庁舎を、庁舎一本化に伴い取り壊すこととなり、その跡地利用が懸案事項となっていたこと。2点目は旧郡上郡7町村（八幡、大和、白鳥、高鷲、美並、明宝、和良）にある既存の博物館

施設は、収蔵スペースに余裕がなく、資料の保管環境や調査研究機能も十分とは言えない状況にあったこと。3点目は歴史研究や文化財保護に関わる市民からの文化遺産を保存継承し調査研究する施設整備の要望があったことです。設置の目的は、郡上市においても少子高齢化や社会生活の多様性などにより、地域の有形無形の歴史文化資源が消失の危機に瀕しています。こうした危機的状況にある資源を適切な環境下で保管、整理・調査研究した成果を公開し郡上市の発展に寄与するためとしています。また旧郡上郡7町村に関する行政資料や郡上市の行政資料の内歴史資料として残す必要のある資料を選別し、保管・調査研究・活用するといった公文書館的機能を有することが当館の特徴となっています。これまでに、旧町村時代の議会議事録や年代の古い非現用資料を中心に搬入し調査を進めています。

主な事業内容は以下のとおりです。展示事業は、特定のテーマに沿った企画展と収蔵資料を紹介する資料紹介展を開催しています。展示スペース（約95㎡、閲覧コーナー含む）は狭いのですが、調査研究成果の公開と郷土ゆかりの資料を知っていただく機会としています。次に生涯学習、人材育成等の観点から講座を年間通じて開催しています。主な講座は「古文書講座」、「ふすまの下張り文書はがし講座」、「ふるさと郡上映像シアター」等です。資料の収集・保管については、上述した行政資料以外に、文書資料や画像・音声資料、美術工芸品などですが、当館の知名度が上がるに連れて県外からの寄贈申し込みも増えています。他に『郡上市史』『近・現代編』刊行に向けての事務局を担っており、それも重要な事業となっています。

今後、協会が会の目的として掲げるように、当館は加盟会員との交流・連携をはかり、社会教育の健全な推進と文化の向上に寄与できるよう一層努めてまいり所存ですので、よろしくお願ひします。

大澤洋司（郡上市歴史資料館）



ひと部会活動報告 「岐阜県博物館界の 先達へのインタビュー」 第4弾

収録日：令和7年9月20日(土)
場所：岐阜県現代陶芸美術館
参加者：ひと部会員 4名

ひと部会では、学芸員として長きにわたり経験を積んだ先輩方から話を聞き、記録し、発信する活動を重ねてきました。博物館の役割や学芸員のあるべき姿、協会設立や運営についてなど、先輩方の言葉が、博物館に関わる私たちにとって、日々心に留めておく指針のひとつになれば、という思いで始めた活動です。

第1弾は、当協会前会長の若宮多門氏、第2弾は、自然史家で岐阜県博物館での学芸員経験を持つ小野木三郎氏、第3弾は、京都国立博物館や九州国立博物館で副館長を勤めた伊藤嘉章氏にお話を伺いました。これまでの記録は協会ホームページでアーカイブを見ることができます。

第4弾となる今回は、古川秀昭氏にお話を伺いました。氏は、旧満州奉天市（現瀋陽市）出身、東京育ち。東京藝術大学を卒業後、洋画家として活動する傍ら、岐阜県大垣市でモザイク壁画の仕事に携わります。その後、岐阜県美術館学芸員を経て、同館館長を務めました。現在は、OKB ギャラリーおおがきの館長を務めています。画家、学芸員、館長といった幅広い経験を通して、いま、思うことを次段の要約版に掲載しています。インタビューの全貌は読み物として編集後、協会HPで公開します。ぜひご覧ください。

鍋内愛美（土岐市美濃陶磁歴史館）



古川秀昭氏（収録時）

古川秀昭氏インタビュー（要約版）

岐阜県の印象

岐阜県美術館の館長時代のことだが、岐阜県博物館協会が創立40周年の時に、自治体の出資金が削減されたので、企業から協賛金をもらうことになった。西濃運輸と十六銀行、大垣共立銀行、岐阜信用金庫に、当時、協会の会長だった若宮さんと一緒に行った。西濃運輸で社長の田口さんに会い、若宮さんが大垣市の田口町という、田口家ゆかりの土地に住んでいたことを話したら、「それなら、出資せざるを得ないね」と。そういうレベルで人や組織は動く。500万円も出してくれた。十六銀行と大垣共立銀行が200万円ずつ、岐阜信用金庫が100万円。それで一千万円になった。

私は「この資金で何か大きいことを、数年かけてできるのでは」と思い、協会の会議にかけた。ところが会議で、役人気質の人が、「それは良くない」と言った。「協会会員70館が平等に使うべきだ」と。一千万円を70で割ったら、各々に配分される金額は少額になってしまう。しかもその人は「一度に使ってはいけない。継続していくことが必要だ」と。みんなそれに賛成してしまった。岐阜県の人、外からくるハッピーな物事に、ノーと言ってしまふ気質がある。特異になる、特質を作る、ということが苦手と言える。目立ちたくないし、目立ったら、どう叩かれるか、とか考えてしまう。

これからの岐阜県博物館協会の在り方

岐阜県博物館協会では、毎年、加盟館みんなで、一つの館を持ち上げるような活動を企画することが必要だと思う。そのために全員が、力量も知恵もお金も集中させる。それだけで、一つの館が立派に自立できる施設に成長する。なぜなら、大きな事業をみんなで協力して作り上げるなら、変なことはできない。

反対意見も出るだろうが、それを恐れずに提案するといい。加盟館が一丸となって取り組めば、次年度以降も継続できるだろう。会長の呼びかけは、協会の力を結集することに効果がある。このような取り組みは、どこの都道府県でもできると思うけれど、まだ事例がない。ぜひ岐阜県の博物館協会で行ってほしい。

私は岐阜県博物館協会や加盟館が無力だとは思っていないし、優秀な人材は沢山いる。しかし、繰り返すが、協会内で「平等」や「一律」という考えを意識しすぎではないか。例えば地域ブロック部会に関して、特定の地域ブロックに、5地域分の資金をまとめて充ててはどうか。

その資金を受け取る地域ブロック側も、真剣に活動を見直すはずだ。そういう外的要因がきっかけとなって、より良い展示や、その他の活動につながるかもしれない。

コロナ禍に感じたミュージアムの役割

コロナ禍で全国の美術館が閉館してしまった時、私は朝日新聞、岐阜新聞、中日新聞に依頼をした。こういう時こそメディアは、「美術館・博物館に行きましょう」と書いてくれないか、と。「美術館は空気が綺麗だし、密はない」「その地域に住んでいる人たちの税金で運営しているのだから」と。所蔵作品を紹介する常設展は空いている。そこに展示されているのは、地元に関係あるものが多い。そんな場所が全国に沢山ある。

中日新聞だけから返事があって、結構やり取りをした。新聞社も、国が決めたことに逆らえない。その上での提案として、私が書くと伝えた。そうしたら、ゴールデン・ウィークの頃、東京新聞と中日新聞に同じ記事が出た。私は「美術館はパンデミックの時こそ無料にしてほしい」「企画展はやめてもいい。でも所蔵品展は、私が37年勤めて、混んだことはない。家族で行ける」と主張した。

東京新聞の方は結構、反応があった。同じ頃、東京都知事の小池さんが「美術館・博物館を開きましょう」と言ってくれた。記事がきっかけかどうかは知らないけれど、タイミングとしては記事の直後だった。小池知事は「あそこは空気が綺麗だし、大体環境もいいし」と、記者会見で話した。

どこの地域にも美術館はあって、全国に6000館ぐらいある。美術館連絡協議会だけでも170館はあるのかな。それらの館が今、建て直す時に来ている。「改修の時に、施設の条件に、地域の避難所になることを入れると良い」という提案を美術館連絡協議会にもした。

東日本大震災の時（2013年）には、宮城県美術館が避難所として開いたと聞いた。60何人が避難して来たそう。美術館には美術作品があるから、みんな防犯のことを心配する。でも、美術館は「美術の館」というだけでなく、私たち人間の社会的な営みの場でもある。雨の日も風の日も災害の日も、役に立たないと意味がない。

館長として考えたミュージアムの在り方

私は、美術館の学芸員には、「美術館に来た人が幸せになって帰れるようにすることが仕事だよ」と言いたい。ワクワクした人が来て、絵を見て、自分の今までの人生の甘さを反省して、

深刻になって帰る、といったことも含めて。「問題に気付く場や、楽しく有意義な場にする。来館者の経験が豊かであっても未熟であっても、それが大事だ」ということを、繰り返し伝える必要がある。

今の時代、全国的に、学芸員が作品保存に関して、かなり神経質になったと思う。観覧者に対する禁止事項が多く、それで館内がシーンとなってしまった。確かに、静けさが良いという人もいるし、それも大切。しかし同時に、美術館は賑いの場でもある。仲間同士で絵を見て、語り合うことはあるでしょう。

館長というのは、そういう類いの文句を一手に引き受ける職でもある。県職員とか市職員で、美術館・博物館の経験がない人が、人事異動で館長職に就く場合、その面で問題がある。自分に責任が来ないような場にしていくから。

私は、美術館・博物館は、良いと悪いが紙一重であるところが面白いと思う。感動して涙する人もいれば、パーンと手を叩く人もいるかもしれない。それが良いのだと思う。偉い人が視察に来ると、最初によく言うのは「私は芸術に疎くてね」。そこで私はあえて「どの絵が1番気に入ったか、帰りにお聞きします」と言う。偉い人は、あの部屋のあの絵が良かった、とか感想を言う。私は「それなら良かった」と思う。そういう機会を与えられる学芸員でないといけない。心が固まっている人が、壊されていく体験をするようにするのも、学芸員の役割だと思う。

「curator」に含まれる「cure」という語には、食べ物が腐らないようにするなど、「助ける」という意味がある。頭が固まった人がいたら、それを柔らかくして、助けてあげることもあるはず。

これからの学芸員に求められること

学芸員は、専門分野が変わる可能性を自覚すべきだと思う。学んできた分野以外で、本当にやりたいことが見つかるかもしれない。また、「やりたいことの発見には、自身の努力などではなく、予期せぬ外的要因がきっかけになりうる」と、自覚することが大切。

学芸員は、モノ自体を保存することはもちろんだけど、まだ知られていないモノの価値を保存することも重要な仕事。「価値を見出してこなかったモノや、予期せぬ外的要因でも、自身にとって新しいステップだ」と思える学芸員が望まれる。とはいえ、専門外の新しいことにまで関わると、当然忙しくなって、新しいことに消極的になりがちだ。しかしどこかの瞬間で、「考えてもいなかったが、やってみよう」と思える、きっかけをつかむことこそが大切だと思う。

暮らしの中での 植物利用に関する調査研究

はじめに

令和7年7月22日～12月19日、企画展「めぐる植物のかたち」を開催しました。

本展では、茅葺屋根や藁製民具など土地の資源を利用・循環させることで生まれた造形をピックアップし、生活や文化、産業、信仰の場で植物がどのように活かされてきたのか、それに携わる人々の仕事ぶりについて紹介しました。

様々な人となつながら、言葉を聞き、道具を使う手の動きを間近で見せていただき、たくさんの知識を教わる中で、植物利用というテーマで文化を捉えたいという想いがどんどんふくらみ、本展を企画・開催するに至りました。

以下では、本展の展示および開催までの調査内容・経緯などをご紹介します。

茅葺屋根を造形するという衝撃

本展構想のきっかけは、多治見市記念物（名勝）・永保寺境内に佇む五峰庵の屋根葺替えでした。五峰庵は、木造、入母屋造、茅葺の建築物で、明治38年から大正10年にかけて在任した無底老師の居宅として建てられたものです。



五峰庵屋根修復の様子と葺替えが完了した外観

令和5年12月から令和6年2月にかけて、平成18年以来となる屋根の全面葺替えが行われました。素材を十分に想像できるほど植物をダイレクトに活かした素朴で美しい屋根の造形との出会い、これが本展の始まりでした。

使用する茅材の量を調整し、植物の種類によって機能性をコントロールし、美しいラインを出すためによく研がれたハサミで刈り込む。初め

て目にした茅葺屋根の葺替え作業は、工程や道具のひとつひとつに出会うたびに、また機能やサイクルの美しさを知るたびにときめき、手のひらで土を造形するように自由に柔らかな屋根づくりに、私はすっかり夢中になりました。

そしてこの3か月間に撮影した作業工程と、職人から教わった植物屋根の知識が企画展のベースとなり、屋根を葺くための道具や茅葺の技術について調査を進めることとなりました。

屋根を葺替えるのは、壊れたものを繕うのと同じくらい当たり前のこと

「茅で屋根を葺替える」という仕事は、現在では文化財建造物の修復現場が中心となっていますが、身近な土地に自生している植物を乾燥させ、屋根に葺く（葺替える）ことは、今から100年ほど前は「普通」のことでした。

暮らしの中に当たり前存在していた「屋根を葺く」という行為が、多治見市内の場合では全く姿を消してしまっていること、そして、ひと昔前はあまりにも当たり前だったため、当地域の屋根に関する民俗文化の研究・調査や、郷土資料および古文書資料などは決して多いとは言えず、聞き取り調査を元にした新たな資料作成に進むこととしました。当センターでつながりのある地域の方々や、講師として出向いたセミナーの参加者などにも「茅葺屋根の家に住んでいたことはありますか？」と声をかけるなど、手探りで協力者を探し始め、3か月ほどかけて、多治見市を中心に12名の方に話を聞くことができました。

当初、全国的な植物屋根に関する書籍を教科書として進めていた私にとって、聞き取り調査で「声」を聞いたことは、この土地の民俗文化を知る喜びそのものでした。また、聞き取り調査によって、①五峰庵の葺替え作業で使用された道具が素材の特性に合わせたものであったこと、②当センター収蔵の収集資料が屋根葺きの道具だったこと等、民具のデザインや用途等について新しい気付きを得ることが出来ました。

こうして集めた「声」の資料。撮影した動画を再生するだけでは、せつかく話していただいた言葉の魅力が零れ落ちてしまいそうで、なんだかもったいないと思い、方言などもそのまま活字に起こして記録しました。これを基に音まで聞こえてくるような文字の展示を目指し、ロール紙に印字した書き起こしの文字を展示室の壁面いっぱい、掛け軸のように展示することにしました。また、見開きのノートや雑誌タイプの展示を数冊用意し、日記を読んでいるような気分聞き取りを味わえるような展示にしました。

文字の情報量が溢れるほどのボリューム感になりましたが、そのままの「声」を民俗資料として記録することの大切さを伝える機会となりました。

茅葺屋根の植物をやきものに

暮らしの中に茅葺屋根が当たり前にあった頃、葺替えて生じた古い茅材は、土地の中で再び土に還すなど、美しく循環していました。「茅葺」と「茅採取」がユネスコ無形遺産として登録されているのにも、この点が大きく関わっています。企画展のタイトルに「めぐる」という言葉を選択したとおり、「五峰庵の屋根葺替え」を文化財修復の作業工程を説明する展示内容で終わらせず、葺替えを土地と結びつけ、茅材のサイクルを実現させたいとの思いに駆られ、美濃加茂市在住の陶芸家で、野焼きによる作品制作を行っている阿曾藍人氏にお声がけしました。

五峰庵で使用されていた古い茅材や、刈り込みでできた茅の破片を野焼きの燃料として使用してもらえないかとお願いしたところ、多治見工業高校専攻科生徒の野焼き実習で使っていただけになりました。



ススキを利用した野焼きの様子

乾燥した植物は燃焼性が高く、古くから生活の中で燃料として利用されてきましたが、不要となった屋根材を、土の造形を生み出すために使うという方法を試みることができ、この野焼きによる力強い作品20点も展示しました。

稲わらで作った「かやねぐら」

また会期中には、親子対象のワークショップを実施しました。茅葺職人の技や植物屋根の機能を生み出すことと学びの機会をつくり、来場者が体験できる造形物を生み出すことを目指し、講師には五峰庵の屋根葺替えに携わった茅葺職人集団 TSUCHI NI KAERU を招きました。素材を使う技とあふれるアイデアで造形された竹材のドームを下地にして、稲わらを使用した茅葺きの「かやねぐら」が完成しました。

「材料は現地調達で」という講師の言葉から、トラック一杯の稲わらを集めることになりましたが、稲刈りシーズンが終了している時期だったため市内では見つけることができず、ようやく八百津町の農家から分けていただくことができました。

植物屋根の機能をぎゅっと凝縮した「かやねぐら」を、地域の子供たちと一緒に作り、土地とつながるワークショップを開催できたことを嬉しく思います。ワークショップ冒頭の説明で、

講師の藤原拓馬さんは「鳥が巣を作るみたいに、身の周りに生えている草を使って誰でもできる屋根葺きの方法を教えるので、ぜひ手順を覚えて、技を持ち帰ってください」と参加者に話されました。稲わらを触った手のひらや指の感覚が、この先も残ってくれると嬉しいです。



ワークショップの様子と完成した「かやねぐら」

農とつながる造形、見えてきたもの

土地の資源を暮らしへと利用してきた実態は、農業と深く関わっていることから、本展では稲わらの陶磁器梱包への利用、信仰の場での植物利用など、農とつながる造形についても紹介しました。特に、信仰の場に古くから残る「しめなわ」の文化は、稲わらの入手が難しいことや緋染技術を持つ人が減ってきていること、また、そもそも造形物としての保存対象ではないことから、地域の実態をつかむことが難しい印象です。

このような分野をはじめ、地域の民俗文化を丁寧に調査し、記録を保存する必要があると実感しています。会期中に来館された岐阜県森林文化アカデミーの柳沢直教授から、土地の文化を形成する「風土」という視点を教えていただいたこともあり、今後は「風土」を意識しながら、文化財がまだ身近ではない方々への入口を作るような展示ができれば嬉しいです。



聞き取り内容の展示

三輪由美（多治見市文化財保護センター）

第178回 公開講座(見学会) 「可児市戦国山城ミュージアム ～兼山のまち・金山城跡めぐり～」

日 時：令和7年11月18日(火)
場 所：可児市戦国山城ミュージアムほか
参加者：17名
講 師：長沼毅氏(可児市歴史資産課・学芸員)
備 考：岐阜県博物館協会中濃ブロック部会と
岐阜県歴史資料保存協会中濃地区との
合同開催

可児市戦国山城ミュージアムは、可児市兼山地区に残る国の指定史跡「美濃金山城跡」と城主森氏をはじめ市内各地の山城、さらに兼山のまちの歴史を紹介する資料館です。可児市に合併する前にあった歴史民俗資料館をリニューアルし平成30年6月にオープンしました。

施設は明治18年(1885年)に竣工した小学校校舎を利用したものです。展示室では金山城の構造や歴史のほか、木曾川流通の重要拠点として栄えた兼山(金山)の歴史が詳しく紹介されており、長沼学芸員からの解説を伺いつつ見識を深めました。



そのあと金山城跡本丸まで登りながら、当時の姿のまま残る石垣や数多くの遺構を見学、戦国時代の息づかいを肌で感じることができました。頂上の本丸跡からは西方に木曾川や猿啄城など周辺の山城跡を望むことができ、当時この城が美濃における重要な戦略的な拠点であったことを実感することができました。

可児光生(美濃加茂市民ミュージアム)

岐阜県博物館協会 共催イベント 特別講演「濃尾崩れから考える 江戸時代のキリシタン禁制」

日 時：令和7年8月3日(日) 13:30～15:00
場 所：美濃加茂市民ミュージアム 緑のホール
参加者：約100名
講 師：大橋幸泰氏(早稲田大学教授)
共 催：岐阜県博物館協会

美濃加茂市民ミュージアムでは、2025年夏に早稲田大学文化推進部文化企画課との共催展「美濃のキリシタン―秘められた祈りの証し―」(会期：7月12日(土)～8月24日(日))を開催しました。かつての美濃地域は為政者の守護下に多くのキリシタンが生まれた地であり、17世紀中期には信者の大規模検挙「濃尾崩れ」が発生しています。本展は美濃の各地に伝わる資料や伝承を扱いながら、美濃のキリシタンの歴史について改めて焦点を当てたものでした。

会期中の8月3日には、キリシタン研究の第一線で活躍されている早稲田大学・教育総合科学学術院教授の大橋幸泰氏を講師にお招きし、特別講演を開催しました。大橋氏には本展の企画段階からご指導・ご助言をいただき、6月中旬に行われた可児や御嵩地域における実地調査も踏まえたお話をいただきました。

講演のテーマは、美濃における検挙の事例を手がかりに、多様な史料を通してキリシタン禁制がもたらした江戸時代の秩序を考えるもの。島原天草一揆を画期とした宗教政策を紐解き、これまで重厚な研究に基づいた幅広いお話を展開されました。特に「濃尾崩れ」の発端となった塩村(現・可児市塩)の厳しいキリシタン類族差別について論考は、これまでの地域史研究に対する新しい視点であったといえます。

講演後には多数の来場者から質問が寄せられ、江戸時代の宗教政策や美濃のキリシタンの実態について、より理解を深めるイベントとなったのではないかと思います。



岩屋孝志(美濃加茂市民ミュージアム)

中濃ブロック部会 研修会 「接触モデル作成のための 3Dスキャン講座」

日 時：令和7年9月20日(土) 13:00～15:00
場 所：岐阜女子大学(岐阜市太郎丸80)
参加者：54名
講 師：渡辺哲也(新潟大学工学部教授)
備 考：岐阜県博物館との連携事業

近年、博物館・美術館は、社会的包摂の拠点へと転換を迎えています。博物館展示について展示物の接触モデルを作成・展示することで、視覚障害者にも鑑賞可能になるのみでなく“触りながら観察する”ことによる発見があり、一般利用者にも価値のあるコンテンツになると思います。

今回、人間支援感性科学プログラムとしてICTを活用した視覚障害者支援技術の研究・開発をされている、渡辺哲也 新潟大学工学部工学科教授をお招きして、「接触モデル作成のための3Dスキャン講座」を開催しました。

まず触図と立体モデルを参加者に触ってもらい、立体モデルの方がより詳細にわかりやすくイメージもしやすいことを理解してもらい、その上で3Dスキャンを実際に行ってもらいました。今回はタブレット等でもスキャンできるフォトグラメトリと、縞模様などの光を投影し、その歪みから形状を解析する構造化光方式スキャナーを使用して対象物をスキャンしました。

前者は手軽で簡単にスキャンでき、PC上で見るには詳細にスキャンできているようにみえますが、生成されたデータから3Dプリンターによって作成した立体模型は細かな部分が表現されていませんでした。

一方後者はスキャン時の基準点を見失いやすくスキャンに技術を要しましたが、生成された3Dデータは細部までスキャンされており、立体模型作成に適していました。後者専用機器は高額なため導入へのハードルが高いですが、一度データをつくと立体模型作成以外にも様々な活用ができます。今後、館同士の情報・技術交流が盛んになり、協力してデータ作成が行えるようになれば、全体としてのアクセシビリティの向上にもつながると感じました。

東條佳緒里 (岐阜県博物館)

中濃ブロック部会 研修・交流会 「重要無形民俗文化財小瀬鶺鴒 ー歴史と普及啓発への 取り組みー」

日 時：令和7年10月10日(金) 15:30～19:30
場 所：鮎之瀬ふれあいセンター
参加者：10名

本研修会では、国の重要無形民俗文化財に指定されている関市の小瀬鶺鴒について学び、実際に船に乗って鶺鴒を見学することができました。

まず、関市文化財保護センターの森島一貴氏から、小瀬鶺鴒の歴史や小瀬の鶺匠について、そして、鶺鴒を次世代につなぐための普及啓発についてお話いただきました。現在、小瀬鶺鴒は、少子高齢化による担い手不足に直面しています。しかし、関市は、打開策として、子ども向けの船頭体験プログラムや、ワークショップ、鶺匠の家の見学ツアーなど、様々な取り組みを行っていることが分かりました。

次に、現在小瀬で活躍されている鶺匠さんの家を訪れ、鶺が飼育されている様子を見ることができました。森島氏によると、鶺鴒で用いる鶺は、野生のウミウであり、茨城県日立市にある捕獲場で捕獲します。鶺の飼育方法として、「かたらい」と呼ばれるものがあり、鶺を2羽ずつペアにして生活させることで、互いに仲を深め、飼育も容易になると学びました。鶺匠さんの家で飼育される鶺は、見学者が訪れても驚いたり逃げたりすることなく、元々野生であったとは思えないほど人間慣れた様子でした。鶺鴒は、「かたらい」という受け継がれた先人の知恵や、鶺匠と鶺の信頼関係の上に成り立っているということを実感しました。

日が沈んだ頃、実際に船に乗り、鶺鴒の様子を観覧しました。鶺鴒が始まる前に、鶺匠さんから実際に使う道具を見せていただきながら、鶺鴒のやり方を教えていただきました。小瀬鶺鴒は、周囲の騒音がほとんどなく、明かりも少ない中に、篝火だけが明るく輝いており、非常に幻想的な雰囲気でした。これらの体験を通して、1000年以上受け継がれ、精錬されてきた技術の素晴らしさを実感できました。実際に体験することで、伝統技術を知り、次世代につなぐきっかけになると強く感じられた研修会でした。

佐竹祐佳 (岐阜県博物館)

第105回 会員研修会 「展示を考える」

日 時：令和7年12月11日(木) 13:30~16:00
場 所：土岐市文化プラザ
参加者：22名
講 師：伊藤嘉章氏

東濃ブロック部会・ひと部会の連携事業として、愛知県陶磁美術館総長・町田市立博物館館長の伊藤嘉章氏を講師にお招きしました。

前半は座学で、「展示に正解はない」が、良い展示とは「イヤ（嫌）を無くしていくことが基本」との考え方を学びました。イヤとは、例えば展示品の傾き、注意を促すパネルの過剰な配置、ガラスの継ぎ目部分に作品・資料を置くこと等、円滑で心地よい鑑賞の妨げとなる要素の意で、それらの排除を重ねていくことが良い展示につながるという内容でした。

また、展示台の高さや色を変えること、関連資料を比較して配置することで、時代・場所等の関連性やまとまりをイメージしやすくなる。展示品が古来鑑賞等されていた環境を再現するような照明を設定することで、展示品の価値や意義を分かりやすく伝えることができる。キャプションにはキャッチコピーや短い段落の文書を用いると、来館者の注意を引くことができる等の考えもご教示いただきました。



後半は場所を移しての実習でした。まずは、同じ重さの沓茶碗と湯呑みを持ち比べて重量の違いを感じ、なぜ沓茶碗は歪んでいるのか？というモノの本質を考える重要性を学びました。

続いては実際に陶磁作品を用いて、バランスの良い展示とは何か？を各自が考え、模擬展示を実践。展示ケースはもちろん、展示スペース全体のバランスも意識することの重要性を学びました。

研修にご協力いただいた土岐市美濃陶磁歴史館の皆さま、誠にありがとうございました。

砂田普司（瑞浪市陶磁資料館）

中濃ブロック部会 交流会・座談会 「資料保存について 情報交換してみませんか？」

日 時：令和7年12月9日(火) 13:30~15:00
場 所：みのかも文化の森 工芸室
参加者：12名

令和7年7月28日～8月1日、私は東京国立博物館黒田記念館内で開催された「博物館美術館等保存担当学芸員研修（基礎コース）」に参加しました。この研修の主催は独立行政法人国立文化財機構文化財活用センターで、文化財の保存環境の概論から温湿度管理、環境計測の方法、IPM、防災や写真の保存など多岐にわたって基礎的な知識を得ることができました。

中濃ブロック部会で、この研修の内容を発表して欲しいと声を掛けて頂いたため、この日は自分が発表者として、最初に5日間の研修で得た知識のうち、自分も他の受講生も興味を持った部分に焦点を絞り、研修内容を報告しました。研修では自分の館の立地条件、空調機器の状況、建物や展示ケースの構造を理解すること、観察とモニタリングの重要性が終始、強調されていました。そういった基本となる考え方と共に、低予算ですぐ実現できそうな具体的な事案なども伝えるようにしました。

そしてこの後、各館の情報交換の時間を設けました。当館では長年、展示室の温湿度の管理に悩まされてきました。しかし意見交換をしてみると、温湿度管理よりも虫害に悩む館が多いと分かりました。そこで既に対策に取り組んできた館が何を使い、どう対処しているか事例を発表しました。日々の観察と清掃を継続する学芸員の努力を知ることは、大きな刺激になります。他にも異分野の資料をひとつの収蔵庫で管理する場合の温湿度管理、燻蒸の今後、写真の保存資材など、様々な課題について話しました。

同じ岐阜県内でも館の状況はそれぞれに異なります。資料保存は何が正解か分からない、学芸員が日常的に不安を抱えるトピックの一つです。だからこそ問題意識を共有し、互いの経験を擦り合わせ、自館で可能な改善策を考える場は大切です。協会の活動として、誰かが参加した研修内容を発端に各館の情報を共有し、皆で考える会を今後も開催すると良いと感じました。

和歌由花（美濃加茂市民ミュージアム）

岐阜県博物館協会共催
「第47回日本民具学会・
大会前日オプション見学会」

日 時：令和7年11月7日(金) 13:30~16:00
場 所：徳山民俗資料収蔵庫
参加者：37名

日本民具学会と岐阜県博物館協会の共催で、第47回日本民具学会・大会前日オプション見学会が開催されました。

本見学会では、揖斐川町の徳山民俗資料収蔵庫を見学し、同収蔵庫の資料収集に携わった脇田節子氏より、収集・整理当時のお話を伺いました。収蔵庫には、国の有形民俗文化財に指定されている旧徳山村の山村生活用具とともに、資料の使い方などを説明したキャプションが設置されています。脇田氏は、キャプションに絵を入れることで、資料の使い方をイメージできるとお話しされ、見学者の目線に立つ姿勢が勉強になりました。また、資料収集当時の思い出を、資料を優しく触りながらお話しされる脇田氏の姿も印象に残りました。

また、11月8日、9日には、郡上市明宝において、岐阜県博物館協会の後援により、第47回日本民具学会大会が開催されました。ここでは、協会会員も参加して行われた8日の大会について紹介します。8日は、明宝文化財保護協会の清水哲也氏と原義典氏による対談や明宝歴史民俗資料館の見学などが行われました。清水氏と原氏は、長年、同資料館の運営に携わってこれ、清水氏の師である初代館長の金子貞二氏が行った民具収集についてお話しいただきました。金子氏は民具の収集とともに、地域のお年寄りから様々な話を聞いて「奥美濃よもやま話」(全5巻)をまとめました。清水氏と原氏は、金子氏から受け継いだ、明宝の民具と「奥美濃よもやま話」を守り、伝えていく熱い思いを語られました。

大会、見学会を通して、民具を後世に残すとともに、その使い方や、そこから見えてくる当時の人々の暮らしを伝えようとする方々の熱い姿勢が印象に残りました。民具に付随する様々な語りや情報は、伝える人がいなければ消えてしまうということを痛感するとともに、それらを伝えるために博物館には何ができるのか、考えさせられる3日間となりました。

佐竹祐佳 (岐阜県博物館)

飛騨ブロック部会
「3Dデータ化合宿」

日 時：令和7年9月6~7日
場 所：飛騨みやがわ考古民俗館
参加者：19名

「3Dデータ化合宿が文化庁の『ミュージアムDX実践ガイド』に載っている！」こんなニュースが昨年度末に入ってきた。この合宿は、飛騨みやがわ考古民俗館(以下、当館とする。)の収蔵資料を使って3次元計測技術を習得してもらう企画である。参加者が取得した3Dデータを、当館のファンで作る石棒クラブが公開する点を特徴とする。同ガイドには、「博物館活動の内側とその資料に接し、楽しみながら参画することで関係性を深める」と触れられている。では、博物館における楽しみとは何か。それは個人によって異なるため、それを捉えるのは困難である。しかし、多くの方に共通するのは「博物館の資料に触れること」である。その過程で特定の資料に愛着が生じ、「推し」として発信者となる方も多し。3Dデータ化合宿は参加者にとって、そのような資料に触れる機会にもなっている。一方、出発点は予算も人手もない状況で3Dデータを公開したいという当館の思いからであった。この困りごとに対し、多くの方が支援を継続する状況となっている。

今回で5年目となった3Dデータ化合宿には、野口淳先生と森健人先生を講師に迎え、高校生から社会人、東北から関西まで幅広い参加者が集まった。2日間の日程で石棒等のデータを取得。石棒クラブのSketchfabアカウントで公開した。今回で公開数は202モデルとなり、全国の歴史系博物館で1位の公開数となった。当館にとって「困りごと」を解決する企画が、県博協に育てていただき、いまや全国で知られる企画に成長しつつある。



三好清超 (飛騨みやがわ考古民俗館)

図書紹介

『47都道府県・美術館百科』

可児光生・草刈清人・齋藤智愛・福富幸 共著
丸善出版/令和7(2025)年発行

「47都道府県・百科シリーズ」に、美術館版が昨年末、ついに刊行された。

本書は、日本全国に広がる美術館の魅力を、都道府県ごとに丁寧に紹介する一冊である。北海道から沖縄まで、それぞれの地域に根ざした美術館の特色や所蔵作品の傾向、活動内容などをわかりやすく解説し、日本の美術館の全体像を多角的に示している。

本書の特徴は、単なる施設案内にとどまらない点にある。第Ⅰ部では、美術館とはどのような役割を担う場なのか、その歴史や制度、運営の裏側、学芸員の仕事、展示の工夫などを解説し、鑑賞の視点を深める助けとなる情報が満載である。これにより、読者は美術館を探し訪ねるだけでなく、美術館の面白さや奥深さを知るきっかけを得ることができる。普段何気なく訪れている美術館の裏側にある理念や努力を知ることで、美術館体験はより深く、豊かなものになるだろう。

第Ⅱ部では、47都道府県別に代表的な美術館を取り上げ、それぞれの地域文化との関わりを紹介する。大規模な公立美術館だけでなく、特色ある私立館や個人美術館にも光を当てている点が興味深い。地域ゆかりの作家を中心に据えた館、建築そのものが見どころとなっている館、教育普及活動に力を入れる館など、多様な事例を通して、日本の美術館の広がりや個性が浮かび上がる。

さらに巻末には、都道府県別の館数データや関連法規、関係団体や機関などの資料も収録され、研究や学習にも役立つ構成となっている。旅行のガイドとしても、文化政策や博物館学を学ぶための参考書としても活用できる実用性を備えている点も魅力である。

本書は、美術館を愛好する人はもちろん、これからアートに親しみたいと考える読者にとっても心強い案内役となる。AI活用やネット検索が当たり前の時代にあつて、本書はコスバやタイパとは真逆の魅力を放っている。美術館紹介には外観写真やホームページのURLは掲載されていない。本を読んだだけで「行った気」や「知った気」にさせない。むしろ、実際に訪れなければ全貌はわからないと静かに促してくれる。

この本を携えて美術館を訪れたい。そう思わせる一冊である。宮崎香里(岐阜現代美術館)



博物館協会インフォメーション

岐阜県地域資料関係団体連絡会 について(その2)

令和7年12月25日、岐阜県図書館で岐阜県地域資料関係団体連絡会の第3回会合を開催し、意見・情報交換等を行いましたので、最新の動向をお知らせします。

岐阜県歴史資料保存協会は、岐阜・西濃・中濃・東濃・飛騨の5地区、岐阜県郷土資料研究協議会は岐阜・西濃・美濃・可茂・東濃・飛騨の6地区に分かれていることから、当協会を含めて各地区の役員(人材)情報を共有しました。今後、地区ごとにイベントを共催するなど、必要に応じて連携を図り(中濃ではすでに実施)、交流を深めていくことに賛同が得られました。

また、各団体の考えや意識を共有するために活動の目的、当面の活動内容を明文化することが提案され、「岐阜県地域資料関係団体連絡会活動方針(案)」についての協議に着手しました。

地域資料とは何を指すのか(保存・継承等の対象は何か)、保存・継承等が困難となっている要因をどのように捉えるか、多くの方に賛同・理解をいただける文言を作成すべく様々な意見が出され、今後も協議を継続していくこととなりました。

また、各団体が連携して取り組むことができる事業のアイデアが出され、当協会からは創立60周年記念誌への投稿、記念事業への参加等を提案しました。各団体とも令和8年度予算・事業計画に未定な部分もありますが、後援や協賛も含む連携の継続、事業の情報共有等を継続していくことに合意が得られました。

次回の会合では、上記の活動方針(案)等について意見交換を行う予定ですので、その内容や結果等は改めてご報告します。

砂田晋司(岐阜県博物館協会企画委員長)

岐阜の博物館 News Letter No.198

編集:岐阜県博物館協会「こと部会」

発行:岐阜県博物館協会

事務局:〒501-3941 関市小屋名1989(岐阜県博物館内)

(電話)0575-28-3111 (FAX)0575-28-3110

(URL)<https://www.gifu-museum.jp/>